人間発達科学部紀要　第８巻第１号：9－22（２０１３）

子どもの認知する親の養育態度と意欲との関連について
―養育態度を「統制」の仕方からとらえて―

姜　信善・山崎　悠希*

The Relation between Child's Motivation and Child's Cognition of The Parents' Attitude towards Bringing up The Child
– Focus on "The Method of Control" –

Sinsun KANG, Yuki YAMAZAKI*

キーワード：意欲，小学生，親子関係，統制，モニタリング
keywords：Motivation, Primary School Children, Parent-Child Relationship, Control, Monitoring

問題と目的

2003年に行われたOECDの調査において，学習時間や学習内容への興味が国際平均値よりも低いという結果が示されたことや，フリーターやニートが社会的に増加していることから，文部科学省は，学習意欲・勤労意欲の低い青少年が増えつつあると指摘している。この若者の「無気力」は昭和後期より世間一般で言われるようになり，深谷（1990）は，この「無気力」の傾向が児童期にも及んでいると指摘している。笠井（1995）は，子どもたちの無気力状態や無気力傾向は，「学業に対する選択的な無気力」ばかりでなく，友人関係や進路など生活全般に広がっていると考察している。船木（2005）は，学校で起こるいじめや不登校などの諸問題の影には，少なからず無気力が関連しているのではないかと述べている。

文部科学省（2007）は，青少年期について，「青少年期とは，大人への準備期間として人格の基礎を築き，将来の夢や希望を抱いて自己の可能性を伸展させる時期である。自己や社会の様々な物事に興味・関心を抱き，知識・技能の獲得や課題の克服，目標の達成等へ向かって意欲を持つことが，成長のための行動の原動力となるのであり，青少年期には特に，このような意欲を持って生き生きと充実した生活を送ることが重要である」と述べ，青少年期の積極的かつ意欲的な活動の重要性を強調している。その中でも，児童期は人生の基礎を築く時期である。運動については，運動能力が飛躍的に向上するとともに，体力の基礎を作る時期とされる。また，Erikson（1950）は，児童期は友達と遊んだりすることで人間関係を学んでいく時期であるとしている。加えて，学習面においても児童期は重要であり，中学以降の基礎となる部分について学ぶ時期である。児童期を意欲的に過ごせるようにするということは，船木（2005）が述べるようないじめや不登校などの問題を予防するというだけでなく，授業や友人関係における経験や学びを意義深いものにするということにつながる。同じ環境で勉強をしたり運動をしたりして過ごした子どもたちでも，意欲的と非意欲的では，勉強や運動といった活動に意味を感じながら意欲的に生活する方が勉強や運動がよりいっそう大きな意味を持つものになるだろう。また，児童期から，学校に入り，体系的な教育（授業）が始まる（櫻井，2011）。自ら学ぶ意欲は学習行動を生起させ，安心して学べる環境によって学習行動が成功裏に終わると，学習行動の結果として「おもしろい・楽しい」といった感情，有能感（自律感を含む），充実感が発生する（櫻井，2011）。Erikson（1950）は児童期の発達段階について「勤勉性 対 劣等感」を挙げ，児童期に，他者に認めてもらう経験が少なかったり，また充実感を感じることができなかったりした場合，劣等感を抱くことになるとしており，児童期に有能感を獲得するためにも意欲は重要であると考えられる。また，意欲は，人生のごく初期から最期まで生活に深く関連するものであり（柏木・宮澤・宮下，1996；厚生省（現厚生労働省），2000），児童期の

*富山大学人間発達科学部　平成24年度卒業

段階で，外部からの報酬に依存せず，自発的に意欲を持って行動する姿勢を身につけることは重要であると考えられる。以上のように児童期の意欲は，児童期を意義のあるものにするために，また，有能感を獲得するため，大変重要なものであり，児童が意欲を持って生活できるようにするために，児童期の意欲に関連する要因について明らかにしていくことが必要であろう。

意欲には，周囲の人間の「指導・統制」的関わりが関連していることが考えられる。長年，動機づけに関する研究では，動機づけは「外発的動機づけ」と「内発的動機づけ」の 2 つに分類されてきた。外発的動機づけは，外的な報酬や叱責に基づく動機づけを指し，内発的動機づけは，内的な達成感や楽しさに基づく動機づけを指す。速水（1993）は，“内発的動機づけが本人自身の自発性によっているとしても，それが本人自身に生得的に備わっている場合はむしろ希である。多くの場合，人は特別の経験を重ねる中であることを自発的に取り組もうとするようになる。とりわけ日常的な教育場面においては，初めから学ぶことが楽しいというよりは外発的動機づけが高められ，成功経験が重ねられ，その課題や教科に対する自己概念が変容し，有能感が高まることによって内発的動機づけが導かれる場合が少なくないと考えられる。”と述べており，外発的動機づけに周囲からの賞賛や叱責，賞罰が関連していることは言うまでもないことであるが，内発的動機づけを育てることにも同様に周囲からの賞賛や叱責・賞罰が関連していることが示唆される。そのため，どのような「統制・指導」の仕方によって意欲を高めることができるのかについて検討を行っていくことは，児童の意欲に関連する要因を検討していくうえで，意義深いことであると考えられる。また，一般的に，子どものことを思い受容的な態度をとるだけでなく，子どものために指導・しつけを行っていくことが重要であるとされてきたことを踏まえても，「統制」の仕方が子どもの意欲に及ぼす影響について検討を行っていくことが必要であるといえよう。

特に，幼児期から続いてきた継続的関わりにより，家庭で行われる「統制」は児童にとって重要な意味を持つものであることが推察されるが，先に述べた李（2000）の研究は青年期を対象に行ったものであり，児童期の意欲と「統制」との関連についての研究はあまり見当たらない。

親の養育態度が児童に与える影響は大きく，これまでに様々な研究がなされている。八越（2008）は，“これまでに，児童期における仲間からの受容には適切な社会的スキルと共感性が必要であること，そして，その社会的スキル，共感性の発達に母親の情緒的支持が関連していることが明らかになっている。すなわち，母親の情緒的支持が児童の社会的スキルや共感性を通して児童の学級適応に影響を与えると考えられる。”とし，養育態度の「情緒的支持」の側面が学級適応に与える影響について検討している。そして，“優しくて温かい受容的な母親の養育態度が，児童の社会的スキル獲得の程度を高めるとともに共感性を望ましく発達させること，そして，その社会的スキルおよび共感性が児童の学級適応を高める”ことを明らかにし，また，“母親と自分の関係が情緒的に安定していると認知している児童は，母親に対する同一視を通して，良好な友だち関係を形成し維持していくための社会的スキルや共感性を身につけていく”のではないかと八越（2008）は考察している。戸ヶ崎・板野（1997）の研究では，母親の養育態度と社会的スキルの関連について検討しており，“養育態度が拒否的であるほど，児童は攻撃的な行動を多く獲得していること“を明らかにしている。

戸ヶ崎（1999）は，“親子関係は，子どもが経験する最初の対人場面であり，初めて社会的スキルを学習する場面である”と述べている。加えて，菅原ら（2002）も，“児童期は，学校生活や友達集団の中で子どもの世界が飛躍的に広がり，社会的な発達が著しい時期である。この時期の子どもたちの家庭外での成長・発達を支えるのは，子どもが依って立つ家族関係であり，家族関係が健全に機能しているかどうかが精神的安定や学校適応などに大きく影響するものと考えられる”と述べている。一般的に児童期は，幼児期の家庭中心の人間関係から友人や教師など学校生活中心の人間関係に大きく移行する時期といわれるが，それでも家庭の影響力は依然として大きいと考えられる。これらのことを踏まえ，意欲と親からの「統制」的関わりとの関連を検討していくことは，子どもたちが意欲的に生活できるようにするために，意欲と養育態度との関連について検討していくうえで，重要であるだろう。そこで，本研究では，意欲と養育態度の「統制」的関わりとの関連を明らかにすることを目的とする。具体的には，

指示・支配的な「統制」の仕方をされることによって，「自分で考えない」習慣が身に付き，友人や教師など他者の言う通りに従うようになることは充分に予想できる。また，「親から怒られること」を回避することが第一となり，なるべく怒られないように行動することから消極的になることが予想される。一方で，子どもの意見や考えを尊重しながら行われる「統制」の仕方により，子どもの自尊心が保たれ，また，自分の考えや思いによって自発的に行動する姿勢が身に付くことで，意欲的になりやすいのではないかと推察される。

またそれらについて検討を行う際，養育態度及び意欲については下記のことを考慮に入れ調べていく。

まず，養育態度について，本研究における捉え方は以下のとおりである。先述の武田（2010）の研究では，「親の期待に応えたい」と感じている子どもの意欲は親の期待によって上昇する一方で，「親の期待に応えたいとは思わない」子どもに対して親の期待は負の効果を持ち，かえって自己否定感を高めてしまうという傾向が観察されている。このことから，武田は“従来の研究では一方向的に扱われていた親の期待は，子どもの受け止め方によって与える効果が異なるということが検証された“としている。また，篠原・福山（1987）は，親の養育態度の影響を受ける子ども自身が親の養育態度をどのように感じ，どのように対処するかに意味がある，としており，李（2000）や廣田（2004）の研究でも，親の養育態度への子どもの認知について検討を行っている。同様の養育の仕方でも，子どもがそれをどのように認知するかはそれぞれの子どもによって異なり，ある養育の仕方を実行しているからと言えど，必ずしも児童に及ぼす影響は一定でないと考えられる。そのため，「親がどのように養育を行っているか」というよりは，「子どもがどのように親の養育を認知しているか」がより重要であると考えられ，本研究では「親の養育についての子どもの認知」を検討していくこととする。

次に，意欲について，本研究における捉え方は以下のとおりである。高野（1988）は，意欲がない状態について，“興味関心がない”，“自信がない”，“目標がない”という３つを挙げている。これを受け，本研究では「興味関心」，「目標」，「自信」という観点を中心に意欲をとらえる。「興味関心」，「目標」，「自信」はそれぞれが直接「意欲」を表すものではないが，「意欲」を構成する重要な観点であると考えられ，本研究ではそれらを意欲ととらえることとする。また，それらが本当に「意欲」と呼べるものなのかを明らかにするために，“運動を積極的にしている”，“勉強を自ら行っている”というように実際の行動として表れる「意欲的行動」にも焦点を当て，「意欲」と「意欲的行動」との関連を明らかにしていく。「意欲」が実際のどのような「行動」として表れるのかについて検討を行うことで，教育現場においてのなんらかの提言が得られるのではないかと考えられる。以上より，本研究では，「養育態度→意欲→意欲的行動」という連続した因果関係を全体的仮説とし，児童が認知している『親』の養育態度および，意欲，意欲的行動についての尺度作成を行い以下のような具体的仮説について検討を行う。

仮説 1. 親の「統制」の仕方について，それが子どもの理解を促しながら進められる統制であれば，意欲に正の影響を与え，また，一方的で子どもの気持ちを無視した統制であれば，意欲に負の影響を与えるだろう。

仮説 2. 本研究で捉える意欲の各側面が，「意欲的行動」と密接に関連しているだろう。

Ⅰ．予備調査（研究 1）

目的

本研究の全体的目的は，養育態度が意欲に及ぼす影響，意欲が意欲的行動に及ぼす影響について検討することである。そこで，意欲及び子どもの認知する親の養育態度に関する尺度を作成するため，意欲及び意欲的行動，子どもの認知する親の養育態度「統制」次元に関する項目を収集する。

方法

（１）「統制」について

【対象者】

小学校 4, 5, 6 年生の児童255名

（T 県の小学校13校，男113名，女142名）

【調査時期】

2012年１月

【調査内容】

家庭で親から実際に子どもがしてもらっていること，および，してほしいと感じていることについて，自由記述での回答が求められた。子どもが希望する

養育についての質問項目が加えられたのは，より幅広い内容の養育態度についての項目を収集するためである。「統制」の仕方に関する項目を収集するために，「統制」が行われると考えられる場面を設定した。具体的な内容は以下で述べる。

なお，子どものそれぞれの家庭の事情を配慮し，回答は「両親」ではなく「いつも自分の世話をしてくれる人(=養育者)」をはじめに想起させ，その人について答えてもらう形式となっており，以下の項目中の「その方」は児童が想起した「いつも自分の世話をしてくれる人」を指す。これはこの後の研究すべてで同様に行うものとする。

①子どもが成功した・いいことがあったときの親の関わり方について
・「テストでいい点がとれたとき，その方に，どうしてもらいたいですか？また，実さいは，どうしてもらっていますか？」
②子どもが悪いことをしたときの親の関わり方について
・「あなたが悪いことをしたとき，その方にどうしてもらいたいですか？ また，実さいは，どうしてもらっていますか？」
③子どもが何かをがんばろうとしているときの親の関わり方について
・「何かをがんばりたいとき，その方にはどうしてもらいたいですか？また，実さいは，どうしてもらっていますか？」
④子どもが悲しんでいるときの親の関わり方について
・「悲しいとき，その方にはどうしてもらいたいですか？また，実さいは，どうしてもらっていますか？」
⑤①～④以外の場面の養育態度についての項目を収集するための設問
・「その方があなたに言ってくれたり，してくれたりすることの中で，幸せだなと思うことがあったら教えてください。」
・「その方に，『もっとこうしてほしいな』と思うところがあれば教えてください。」

（2）意欲について

【対象者】
小学校教諭58名
（T 県の小学校7校　男性19名　女性39名 ）
【調査時期】
2012年１月

【調査方法】
普段学校で実際に子どもと関わる中で，どのような子どもの行動や様子を「やる気がない」と感じるか，自由記述での回答が求められた。子どもの学校生活は，「学業場面」，「対人場面」，「自主活動場面」の大きく３つで捉えることができると考えられるため，それぞれの場面ごとに「やる気がない」と感じる行動や仕草についての質問を行った。また，多様な場面からの検討を行うため，「学業場面」，「対人場面」，「自主活動場面」以外の場面についても回答が得られるように「そのほかの場面」に関する質問を設けた。具体的な項目については以下で述べる。

なお，「現在関わっている最中の子ども」について調べた場合，収集される項目の内容が限定されてしまう可能性があり，また，個人が特定されてしまう可能性も考えられたため，「これまでの教員生活で接してきた子どもたち」についての回答が求められた。

①学業場面(授業・宿題)においての意欲について
・「学業場面(授業・宿題)で，消極的，またやる気がないと感じる子どもの様子について教えてください。」
②対人場面においての意欲について
≪友人との関わり方≫
・「友だちとかかわる場面で，消極的，またはやる気がないと感じる子どもの様子について教えてください。」
≪教師との関わり方≫
・「先生とのかかわりで，消極的，またはやる気がないと感じる子どもの様子について教えてください。」
③自主活動場面での意欲について
・「自主活動場面(委員会・クラブ活動)で，消極的，またはやる気がないと感じる子どもの様子について教えてください。」
④①～③以外の場面の意欲についての項目を収集するための設問
・「その他のやる気がないと感じる子どもの様子について，具体的に教えてください。」

結果および考察

予備調査の結果より，子どもの認知する親の養育態度「統制」及び意欲については，それぞれ次のように分類することができた。

（1）子どもの認知する親の養育態度「統制」の測定項目の内容及びその作成

①測定項目内容について

親の養育態度の「統制」に関する項目については，さらに5つのカテゴリーに分類することができた。なお，本研究では，「統制」を「親の望む子ども像に近づけるための指導・制限」と定義している。

一つ目は≪抑圧≫のカテゴリーである。このカテゴリーには言葉や力で押さえつけて親に従わせるという統制の仕方に関する項目が分類された。具体的には“とても厳しく怒る”，“言い分を聞かずに一方的に怒る”といった内容の項目が集められた。

二つ目は，子どもの努力や出した結果について言葉でほめたりなぐさめたりするという内容の“心理的報酬”のカテゴリーである。具体的には，“テストでいい点をとったらほめてくれる”，“手伝いをしたら『ありがとう』と言ってくれる”といった内容の項目が集められた。

三つ目は，テストなど子どもが努力する場面で親が決めた基準を満たせば物的報酬を与えるという内容の≪物的報酬≫のカテゴリーである。上記の『心理的』報酬とは異なり，このカテゴリーは，“習い事をがんばったら，ものを買ってくれる”，“テストでいい点を取ったらどこかに遊びに連れて行ってくれる”といった『物的』な報酬に関する項目を具体的な内容とする。

四つ目は，親が子どもの状態・行動について把握しているという≪モニタリング≫のカテゴリーである。具体的には，“落ち込んでいるときすぐに気づいてくれる”，“学校での様子を気にしてくれる”といった内容の項目が集められた。

五つ目は，失敗に際し自分で考えることを促す≪理解と内省の促し≫のカテゴリーである。具体的には，“失敗したときに，どうすればうまくいくかアドバイスしてくれる”，“悪いことをしたとき，どこがダメだったか教えてくれる”といった内容の項目が集められた。

②子どもの認知する親の養育態度「統制」の測定項目の作成・検討

予備調査で得られた上述の項目について再検討し，本研究の目的に合わせて測定項目の作成を行った。各項目について，被験者である小学生が回答しやすいように，表現を検討し，問題点がある場合には修正・削除された。最終的に，26項目が親の養育態度『統制』測定項目とされた。

（2）意欲及び意欲的行動の測定項目の内容及びその作成

①測定項目内容について

まずは意欲について述べる。収集された回答内容を検討したところ，高野（1988）の内容に基づいた「目標」，「興味関心」，「自信」の3カテゴリーに「自律」のカテゴリーを加えた4カテゴリーに分類することができた。なお，問題と目的で述べたように，本研究では意欲を「積極的に何かをしようと思う気持ち。あるいは，種々の動機の中から或る一つを選択してこれを目標とする能動的意思活動」（広辞苑，1955）と定義している。実際の予備調査では「意欲がない」状態について調べられているが，それらの内容を参考に「意欲がある」状態の項目が作成され，カテゴリーに分類された。

一つ目は，個人の生活，あるいは集団活動において目標・夢を持っているという≪目標≫ のカテゴリーである。具体的には，“友だちと集団活動の目標を共有して一緒にがんばることができる”，“活動するときは目標を持って取り組む”，“将来の夢がある”など，短期・長期に関わらず目標に関する項目が集められた。

二つ目は，対人・対物的な興味関心に関する≪興味関心≫のカテゴリーである。具体的には，“いろんなことに興味関心を持っている”，“目を輝かせて熱中できるものがある”，“友だちとの交流を積極的に求める”といったように，興味の広さ・興味の強さに関するカテゴリーである。

三つ目は，≪自信≫のカテゴリーである。このカテゴリーは，“自分に自信を持っている”，“自分にできるかわからないことでも思い切って挑戦してみる”といった，自信に関する項目が集められている。四つ目は，自分で考えて自律的に行動することに関する≪自律≫のカテゴリーである。具体的には，“先生に言われなくても自分で考えて行動する”，“決められた仕事だけでなく，自分ですることを見つけて活動できる”といった内容の項目が集められた。

次に，意欲的行動について，本研究では，意欲が実際の行動として表れたものとし，子どもの意欲が行動として表れやすい場面として，「勉強場面」，「運動場面」，「友人関係場面」の3つを想定した。そして，そこで示されると思われる子どもの行動が項目として考えられた。

一つ目は，知識を積極的に取り入れようとし，授業に積極的に参加しているという≪知識探究≫ のカテゴリーである。具体的には，“ 授業中は，積極的に手をあげるようにしている”，“自分の好きな教科以外でも積極的に取り組む” などの項目が集められた。

二つ目は，運動を積極的に行い，運動能力を向上させようと努力するという≪運動能力向上≫のカテゴリーである。具体的には，“なわとびなどで，できる技を積極的に増やそうとしている”，“体育で苦手なことを克服しようと練習している”，などの内容が集められた。

三つ目は，≪交友活動≫のカテゴリーである。このカテゴリーは，“自分に自信を持っている”，“自分にできるかわからないことでも思い切って挑戦してみる” といった，積極的に友だちと関わり，交友関係を広げていくといった内容となっている。

②意欲及び意欲的行動の測定項目の作成・検討

予備調査を参考に作成された項目についてさらに検討を重ね，本研究の目的に合わせて測定項目の作成を行った。各項目について，被験者である小学生が回答しやすいように，表現を検討し，問題点がある場合には修正・削除された。

最終的に，『自律』が 6 項目，『目標』が 6 項目，『自信』が 5 項目，『興味関心』が11項目とされ，すべてを合わせて「意欲」に関する項目とされた。

また，『知識探究』が 5 項目，『運動能力向上』が 3 項目，『交友活動』が 2 項目とされ，すべてを合わせて「意欲的行動」に関する項目とされた。

Ⅱ．子どもの認知する親の養育態度及び意欲，意欲的行動に関する尺度の作成（研究2）

目的

予備調査で収集した項目内容に基づき，子どもが認知する親の養育態度の「統制」及び，意欲，意欲的行動に関する尺度作成を行うことを目的とする。

方法

（1）子どもの認知する親の養育態度「統制」について

【対象】

小学校 4, 5, 6 年生の児童376名（T 県内の小学校 4 校　男187名　女189名）

【調査時期】

2012年11月～12月

【調査内容・分析手続】

予備調査によって収集された子どもの認知する親の養育態度の『統制』に関する，すべての質問項目について，「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらとも言えない」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法により回答が求められた。

回答を「あてはまる」を 5 点，「どちらかというとあてはまる」を 4 点，「どちらとも言えない」を 3 点，「どちらかというとあてはまらない」を 2 点，「あてはまらない」を 1 点とし，因子分析を行った。

（2）意欲及び意欲的行動について

【対象】

小学校 4, 5, 6 年生の児童1253名（T 県と他 1 都道府県内の小学校13校　男647名，女604名，不明 2 名）

【調査時期】

2012年11月～12月

【調査内容・分析手続】

予備調査によって収集された子どもの認知する意欲及び意欲的行動に関する，すべての質問項目について，「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらとも言えない」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法により回答が求められた。回答を「あてはまる」を 5 点，「どちらかというとあてはまる」を 4 点，「どちらとも言えない」を 3 点，「どちらかというとあてはまらない」を 2 点，「あてはまらない」を 1 点とし，因子分析を行った。

結果および考察

（1）子どもの認知する親の養育態度「統制」尺度

予備調査の結果に基づいて作成された子どもの認知する親の養育態度の「統制」に関する質問項目の回答について，プロマックス回転による因子分析を行ったところ，固有値の減退状況などから，4 因子を仮定することができた。プロマックス回転後の因子パターンは Table 1 に示す。

第 1 因子は，“あなたが何をがんばっているのか，その人は知っていると思う”，“あなたが落ち込んでいるとき，その人はすぐに気づいてくれる”，“宿題など，やらなければならないことを忘れていたらその人は声をかけてくれる” などの項目により構成され，親が子どもの状態についてきちんと把握しているという内容の因子となっていた。そこで，第 1

Table 1　子どもの認知する親の養育態度の「統制」に関する項目の因子分析結果（プロマックス回転後）

No	項目内容	F1	F2	F3	F4	共通性
22	今あなたが何をがんばっているのか，その人は知っていると思う	.695	–.007	.085	.059	.479
26	宿題など やらなければならないことを忘れていたらその人は声をかけてくれる	.564	–.009	.143	–.007	.252
17	その人は 結果だけでなく あなたががんばっている姿を見て「がんばったね」とほめてくれる	.533	.116	–.065	.086	.459
12	その人は あなたが学校でどのようにすごしているかわかっていると思う	.417	.146	–.040	–.053	.232
2	あなたが落ちこんでいるとき その人はすぐに気づいてくれる	.412	.129	–.211	.024	.384
3	勉強をがんばったら どこかに遊びに連れて行ってくれる	–.175	.673	–.016	.317	.568
8	スポーツやテストをがんばったら その人は何か買ってくれる	.018	.654	–.022	.018	.451
13	テストは「○○点だったら□□をあげる」というふつうに 点数でもらえるものがきまっている	.097	.583	.195	–.120	.344
18	手伝いをしたら その人はお小遣いをくれる	.134	.351	–.043	–.147	.150
23	勉強をがんばらないと その人から遊び道具をとりあげられる	.188	.078	.570	–.080	.267
6	その人は あなたの言い分を聞かず 一方的に怒る	–.085	.002	.567	–.063	.406
21	ちょっとしたことでも その人はすぐに怒る	–.225	.001	.514	.009	.423
16	その人は「○○しなさい」という言い方をする	–.002	.060	.475	.005	.219
24	あなたは結果に満足していても その人から「もっとがんばれ」と言われることがある	.104	–.034	.467	.253	.208
5	あなたが何かに失敗したとき その人は「次からはどうしたらいいか考えよう」と言う	.140	.021	.006	.644	.554
10	注意するとき その人は なぜそれがダメだったかをわかりやすく教えてくれる	.273	–.049	–.037	.525	.523
25	あなたが何かに失敗したとき どうすればうまくいくかアドバイスをくれる	.445	–.148	.086	.485	.573
因子間相関	F1	–				
	F2	.391	–			
	F3	–.493	–.162	–		
	F4	.618	.330	–.283	–	
（α係数）		.72	.64	.63	.75	

因子は「モニタリング」と名付けられた。

第２因子は，“勉強をがんばったら，どこかに遊びに連れて行ってくれる”，“スポーツやテストをがんばったら，その人は何か買ってくれる”などの項目により構成され，子どもの努力や成果に物的な報酬を与えるという内容の因子となっていた。そこで，第２因子は「物的報酬」と名付けられた。

第３因子は，“勉強をがんばらないと，その人から遊び道具をとりあげられる”，“その人は，あなたの言い分を聞かず，一方的に怒る”などの項目により構成され，一方的に統制・指導を行うといった内容の因子となっていた。そこで，第３因子は「一方的統制」と名付けられた。

第４因子は，“あなたが何かに失敗したとき，その人は「次からはどうしたらいいか考えよう」と言う”，“注意するとき，その人は，なぜそれがだめだったかをわかりやすく教えてくれる”“あなたが何かに失敗したとき，どうすればうまくいくかアドバイスをくれる”の３項目で構成され，子どもが失敗したり良くないことをしたりしたときに，子どもの理解と内省を促して次につなげられるようにするという内容の因子となっていた。そこで，第４因子は「理解と内省の促し」と名付けられた。

因子を仮定した後に，α係数を算出したところ，因子ごとのα係数は，第１因子，第２因子，第３因子，第４因子のそれぞれにおいて順に，0.72，0.64，0.63，0.75であった。

（２）意欲及び意欲的行動尺度

①意欲尺度について

予備調査の結果に基づいて作成された意欲に関する質問項目の回答について，バリマックス回転による因子分析を行ったところ，固有値の減退状況などから，４因子を仮定することができた。バリマックス回転後の因子パターンは Table 2 に示す。累積寄与率は35.1％であった。

第１因子は“先生が見ていなくても，きちんと活

Table 2　意欲に関する項目の因子分析結果（バリマックス回転後）

No	項　目　内　容	F1	F2	F3	F4	共通性
2	先生が見ていなくても きちんと活動することができる	.677	.151	.000	.046	.484
12	クラスで何かをするとき 先生に言われなくても活動をすすめることができる	.663	.078	.038	.178	.479
7	クラスのみんなと活動するとき 自分の役割を見つけて積極的に行動する	.542	.144	.086	.243	.381
1	何か活動する際は 目標を持って取り組んでいる	.534	.060	.241	.131	.364
22	教室や学校の中をすすんで整えるようにしている	.458	.070	.162	.088	.249
17	話し合いでは 自分の意見を持って参加するようにしている	.421	.061	.176	.252	.275
27	先生から言われた宿題以外にも 自分で勉強している	.351	.140	.170	.049	.174
18	面倒だと思うことが多い	.209	.501	.045	.002	.296
9	みんなで活動や作業をしていても つまらなくなって一人だけ遊んでしまう	.103	.499	.044	.019	.262
14	それほど仲の良くない友達から遊びに誘われても 気がのらないことが多い	.060	.482	.036	.033	.239
23	授業の内容に興味が持てないことがある	.136	.468	-.012	.010	.238
3	友達に「遊ぼう」と言われても 興味のない遊びだったら行かなくてもいいと思う	–.049	.449	.066	.036	.210
26	今 何かがんばりたいことや目標がある	.220	.107	.795	.221	.740
16	将来「これになりたい」と強く思えるものがある	.138	.041	.398	.127	.195
25	自分には出来ることがたくさんあると思う	.276	.069	.293	.694	.649
20	自分にしかできないことがあると思う	.226	.009	.147	.561	.388
	因子負荷固有率	2.261	1.252	1.059	1.049	
	因子寄与率（累積寄与率）	14.132	7.824	6.619	6.556	(35.13)
	(α係数)	0.76	0.61	0.55	0.66	

動することができる”，“先生から言われた宿題以外にも，自分で勉強している”，“教室や学校の中をすすんで整えるようにしている”などの項目によって構成されており，自分で考えて自律的に行動しているといった内容となっている。そのため，第１因子は，「自律」と名付けられた。

第２因子は，“みんなで活動や作業をしていても，つまらなくなって一人だけ遊んでしまう”，“授業の内容に興味が持てないことがある”などの項目によって構成されており，興味関心を感じる対象が人より狭く，また興味関心のなく面倒，嫌だと感じることが多いとう内容となっている。そのため，第２因子は，「興味関心のなさ」と名付けられた。

第３因子は，“今，何かがんばりたいことや目標がある”，“将来「これになりたい」と強く思えるものがある”という２項目によって構成されており，現在，または将来的に達成したいことがあるという内容となっている。そのため，第3因子は，「目標」と名付けられた

第４因子は，“自分には出来ることがたくさんあると思う”“自分にしかできないことがあると思う”という２項目で構成されており，自分の能力に対して自信を持っているという内容となっている。そのため，第４因子は，「能力感」と名付けられた。

因子を仮定した後にα係数を算出したところ，因子ごとのα係数は，第１因子，第２因子，第３因子，第４因子のそれぞれにおいて順に，0.76，0.61，0.55，0.66であった。

②意欲的行動尺度について

作成された意欲的行動に関する質問項目の回答について，プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減退状況などから，３因子を仮定することができた。プロマックス回転後の因子パターンはTable 3 に示す。

第１因子は“わからないことは積極的に調べるようにしている”，“自分の好きな教科以外でも積極的に取り組む”などの項目によって構成されており，積極的に知識の探求を行い，授業にも意欲的に参加しているといった内容となっている。そのため，第１因子は，「知識探究」と名付けられた。

Table 3　意欲的行動行動に関する項目の因子分析結果（プロマックス回転後）

No	項目内容		F1	F2	F3	共通性
36	わからないことは積極的に調べるようにしている		.800	-.101	-.016	.543
35	自分の好きな教科以外でも積極的に取り組む		.749	.035	-.049	.552
38	いろんなことを知りたいと思う		.409	.085	.179	.346
33	授業中は 積極的に手をあげるようにしている		.406	.139	.029	.269
29	なわとびやマット運動では できる技をたくさん増やそうとしている		-.069	.855	-.007	.661
34	体育で できないことがあったら できるまで練習する		.120	.573	.012	.434
37	私は いつもいろんな友だちと遊んでいる		-.025	-.050	.844	.645
32	他の学年や他のクラスの子とも 遊んだりしている		.054	.147	.374	.259
因子間相関		F1	－			
		F2	.585	－		
		F3	.563	.571	－	
（α係数）			.715	.683	.550	

第２因子は，“なわとびやマット運動では，できる技をたくさん増やそうとしている”，“体育で，できないことがあったら，できるまで練習する”という２項目によって構成されており，運動や体育の授業に積極的に取り組んで運動能力を向上させるという内容となっている。そのため，第２因子は，「運動能力向上」と名付けられた。

第３因子は，“私は，いつもいろんな友だちと遊んでいる”，“他の学年や他のクラスの子とも，遊んだりしている”という２項目によって構成されており，友だちと積極的に関わるという内容となっている。そのため，第３因子は，「交友活動」と名付けられた。

因子を仮定した後にα係数を算出したところ，因子ごとのα係数は，第１因子，第２因子，第３因子のそれぞれにおいて順に，0.72，0.68，0.55であった。

Ⅲ．子どもの認知する親の養育態度の「統制」と意欲との関連について（研究 3）

目的

李（2001）では，青年期において母親の養育を「指示・支配」的であったと認知している場合，無気力の「回避・消極」傾向に正の影響を及ぼすと報告している。このことから，統制の仕方は意欲になんらかの影響を与えることが考えられる。そのため，子どもの認知する親の養育態度の「統制」の仕方の各側面が子どもの意欲に及ぼす影響について検討する。

具体的に述べると，本研究では，統制を「モニタリング」，「物的報酬」，「一方的統制」，「理解と内省の促し」という４因子でとらえているが，「モニタリング」，「理解と内省の促し」が意欲に正の影響を与え，「一方的統制」，「物的報酬」が意欲に負の影響を与えるのではないかと予想される。「モニタリング」，「理解と内省の促し」の２因子は，子どもの考えを尊重しながら行われる「統制」であるのに対し，「一方的統制」は親が子どもに一方的に考えを押し付ける「統制」である。子どもの意見や考えが尊重される「統制」では，自分の意志で自発的に行動する姿勢が育つが，一方的に行われる「統制」では，子どもが親の考えに従うことを要求されるため，自分で考えて積極的に行動する姿勢は育ちにくいのではないかと考えられる。

方法

【対象者】

小学校 4, 5, 6 年生の児童376名（T 県内の小学校 4 校　男187名　女189名）

【調査時期】

2012年11月～12月

【調査内容】

子どもの認知する親の養育態度の「統制」および意欲に関する，すべての質問項目について「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらとも

言えない」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の5件法により回答が求められた。なお，測定尺度には，研究2で作成された子どもの認知する親の養育態度「統制」尺度および意欲尺度が用いられた。

結果

【1】子どもの認知する親の養育態度の「統制」と意欲との関係について

まず，子どもの認知する親の養育態度の「統制」が意欲とどのように関連しているのか検討するために，子どもの認知する親の養育態度の「統制」尺度の各因子項目合計得点と意欲尺度の各因子項目合計得点との相関関係が求められた。結果は，Table 4に示す。

「意欲」の第1因子「自律」は，第3因子「一方的統制」を除いた「統制」のすべての因子との間に有意な正の相関関係がみられた（「自律」－「物的報酬」間のみ $p<.05$，他はいずれも $p<.001$）。

「意欲」の第2因子「興味関心のなさ」と統制第1因子「モニタリング」及び第4因子「理解と内省の促し」の間には有意な負の相関関係が見られた。また，統制第3因子「一方的統制」との間には有意な正の相関関係が見られた。（「興味関心のなさ」－「理解と内省の促し」間のみ $p<.01$，他はいずれも $p<.001$）。

「意欲」の第3因子「目標」は，統制第3因子「一方的統制」を除いた「統制」のすべての因子との間に有意な正の相関関係がみられた（「目標」－「物的報酬」間のみ $p<.01$，他はいずれも $p<.001$）。

「意欲」の第4因子「能力感」は，第3因子「一方的統制」を除いた「統制」のすべての因子との間に有意な正の相関関係がみられた（「能力感」－「物的報酬」間のみ $p<.01$，他はいずれも $p<.001$）。

【2】子どもの認知する親の養育態度の「統制」が意欲に及ぼす影響について

相関関係についての結果から，より具体的に子どもの認知する親の養育態度の「統制」が意欲に及ぼす影響について検討するために，意欲の各因子項目合計得点を基準変数とし，子どもの認知する親の養育態度の「統制」の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は，Table 5に示す。また，以下にて，それぞれの基準変数ごとにその結果について詳しく述べる。

a. 意欲第1因子「自律」に及ぼす子どもの認知する親の養育態度の「統制」の影響について

意欲第1因子「自律」に及ぼす影響は，子どもの認知する親の養育態度の「統制」第1因子「モニタリング」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）＝.345（t（326）=4.999***）であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は，R^2＝.121（t（4, 326）=12.319***）であり有意であった。

b. 意欲第2因子「興味関心のなさ」に及ぼす子どもの認知する親の養育態度の「統制」の影響について

Table 4　子どもが認知する親の養育態度の「統制」次元尺度の各因子項目合計得点と意欲尺度の各因子項目合計得点との相関関係

		統制			
		モニタリング	物的報酬	一方的統制	理解と内省の促し
意欲	自律	.352***	.107*	–.082	.245***
	興味関心のなさ	–.194***	–.040	.217***	–.149**
	目標	.336***	.145**	–.033	.284***
	能力感	.352***	.162**	–.076	.319***

***p <.001, **p <.01

Table 5　『子どもが認知する親の「統制的」養育態度→意欲』の重回帰分析

	自律	興味関心のなさ	目標	能力感
モニタリング	.345***	–.139†	.288***	.262***
物的報酬	–.026	.027	.014	.023
一方的統制	.015	.168**	.091†	.019
理解と内省の促し	.047	–.036	.120†	.160*
重相関係数（調整済み R^2）	.121***	.058***	.121***	.139***

***p <.001, **p <.01, *p <.05, †p <.1

意欲第２因子「興味関心のなさ」に及ぼす影響は，第３因子「一方的統制」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.168（t（330）=3.003**）であった。また，「統制」第１因子「モニタリング」において偏回帰係数は，（β）=-.139（t（330）=-.1.941†）であり有意傾向であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は，R^2=.058（F（4，330）=6.10***）であり有意であった。

ｃ．意欲第３因子「目標」に及ぼす子どもの認知する親の養育態度の「統制」の影響について

意欲第３因子「目標」に及ぼす影響は，子どもの認知する親の養育態度の「統制」第１因子「モニタリング」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.288（t（340）=4.246***）であった。また，「統制」第３因子「一方的指導」の偏回帰係数は，（β）=.091（t（340）=1.712†）であった。「統制」第４因子「理解と内省の促し」の偏回帰係数は，（β）=.120（t（340）=1.883†）で有意傾向であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は，R^2=.121（F（4，340）=12.850***）であり有意であった。

ｄ．意欲第４因子「能力感」に及ぼす子どもの認知する親の養育態度の「統制」の影響について

意欲第４因子「能力感」に及ぼす影響は，子どもの認知する親の養育態度の「統制」第１因子「モニタリング」と第４因子「理解と内省の促し」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，第１因子「モニタリング」において（β）=.262（t（335）=3.898***），第４因子「理解と内省の促し」において（β）=.160（t（335）=2.513*）であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は，R^2=.139（F（4，335）=14.634***）であり有意であった。

考察

子どもの認知する親の養育態度の「統制」第１因子「モニタリング」は，意欲第１因子「自律」および第３因子「目標」，第４因子「能力感」に正の影響を与えることが示された。モニタリングについて，Grusec ら（1997）は，モニタリングにより，子どもの思いが自分とは違っていることを知っている親は，子どものためにどのような育児方略でも行っていく準備が供えられている傾向にあるとしている。「モニタリング」によって子どもの状態に即した「子ども中心」の養育が行われ，子どもの意見や考えが受け入れられやすくなることで，子どもは自分の行動や考えに自信を持つことができるようになり，自分で目標を決めて行動することができるようになるのではないだろうか。また，その自信によって，失敗したときにおいても「次は大丈夫」と思うようになり，失敗や恥を恐れない自発的な行動ができるようになるのではないかと推察される。また，「子ども主体」の養育を行っているということは，子どもが何でも自分で考えて自律的に行動することに結びつくことが考えられ，本研究結果はこれによるものと解釈される。

子どもの認知する親の養育態度の「統制」第3因子「一方的統制」は，意欲第２因子「興味関心のなさ」に正の影響を与えることが示された。この結果に関して，「一方的統制」によって，子どもの思いや意見が取り入れられる機会が少なくなり，「親主体」で養育が行われることになるため，子どもが親の言うとおりに行動したり考えたりすることが多くなり，自由にものごとを考えることが難しくなると思われる。

子どもの認知する親の養育態度の「統制」第４因子「理解と内省の促し」は，意欲第４因子「能力感」に正の影響を与えることが示された。失敗したときに「なぜこのような結果になったのか」「なぜこのようなことを自分はしてしまったのか」についてじっくりと考えることを求められることで，子どもが自分の行動の「原因」と「結果」を理解できるようになり，それが「次はできる」「がんばればできる」という「能力感」に結びつきやすいのではないだろうか。

一方で子どもの認知する親の養育態度の「統制」第２因子「物的報酬」は，意欲のいずれの因子との間にも有意な影響を確認することはできなかった。本研究でこのような結果が示されたのは，物的報酬の与え方や受け取る側の内的要因によって子どもの意欲に及ぼす影響が異なるためであると考えられ，今後，「物的報酬」については，児童の内的要因に焦点を当ててさらにくわしく検討を行っていく必要があると思われる。

以上より，仮説１を支持する結果が得られ，子どもの理解を促しながら進められる統制であれば，意欲に正の影響を与え，また，一方的で子どもの気持ちや意見を無視した統制は，意欲に負の影響を与えると言えるだろう。

Ⅳ. 意欲と意欲的行動の関連について（研究 4）

目的

本研究では，高野（1988）の考えに基づき，「興味関心」，「目標」，「自信，「自律」」という 4 つの側面を中心に意欲をとらえている。しかしながら，これらはあくまで「意欲に関する」側面であり，直接的に「意欲」を表すものではない。そこで，本研究では，上記の 4 つの側面とは別に，実際の行動として見られる「意欲的行動」を，「勉強」，「運動」，「友人関係」の 3 つの場面それぞれにおいて設定し，意欲に関する 3 つの側面が「意欲的行動」とどのように関連しているのかについて検討し，本研究でとらえる「意欲」と実際の「意欲的行動」の関連を明らかにすることを目的とする。

方法

【調査時期】

2012年11月～12月

【対象者】

小学校 4, 5, 6 年生の児童376名（T 県内の小学校 4 校　男187名　女189名）

【調査内容】

意欲，及び意欲的行動に関する，すべての質問項目について「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらとも言えない」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法により回答が求められた。

なお，測定尺度には，研究 2 で作成された意欲尺度および意欲的行動尺度が用いられた。

結果

【1】意欲と意欲的行動との関係について

意欲と意欲的行動との関係を検討するために，意欲尺度の各因子項目合計得点と意欲的行動尺度の各因子項目合計得点との相関関係が求められた。結果は Table 6 に示す。「意欲」尺度の「自律」，「目標」，「有能感」と「意欲的行動」尺度のすべての因子の間において，有意な正の相関関係がみられた（いずれにおいても $p<.001$）。意欲第 2 因子「興味関心のなさ」は，「意欲的行動」尺度「知識探究」，「運動能力向上」との間にのみ有意な負の相関関係が見られた。

【2】意欲が意欲的行動に及ぼす影響について

相関関係についての結果から，より具体的に意欲が意欲的行動に及ぼす影響について検討するために，意欲的行動の各因子項目合計得点を基準変数とし，意欲の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は，Table 7 に示す。また，以下にて，それぞれの基準変数ごとにその結果について詳しく述べる。

a. 意欲的行動第 1 因子「知識探究」に及ぼす意欲の影響について

意欲第 1 因子「自律」の偏回帰係数は（β）=.511（t（325）=11.688***），第 2 因子「興味関心のなさ」の偏回帰係数は（β）=–.062（t（325）=–1.545 n.s），第 3 因子「目標」の偏回帰係数は（β）=.183（t（325）=4.258***），第 4 因子「能力感」の偏回帰係数は（β）=.182（t（325）=4.061***）であった。した

Table 6　意欲尺度の各因子項目合計得点と意欲的行動尺度の各因子項目合計得点との相関関係

	知識探究	運動能力向上	交友活動
自律	.652***	.356***	.377***
興味関心のなさ	–.203***	–.154**	–.061
目標	.396***	.436***	.295***
能力感	.466***	.371***	.342***

***p <.001, **p <.01

Table 7　『意欲→意欲行動』の重回帰分析の結果

	知識探究	運動能力向上	交友活動
自律	.511***	.198***	.254***
興味関心のなさ	–.062	–.048	–.032
目標	.183***	.297***	.150**
能力感	.182***	.183***	.203***
重相関係数（調整済み R^2）	.503***	.268***	.202***

***p <.001, **p <.01

がって，意欲的行動第１因子「知識探究」に及ぼす影響は，「興味関心のなさ」を除く意欲のすべての因子において有意であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は，R^2=.503（F（4,325)=82.317 ***）であり有意であった。

ｂ．意欲的行動第２因子「運動能力向上」に及ぼす意欲の影響について

意欲第１因子「自律」の偏回帰係数は（β）=.198（t（325)=3.755***），第２因子「興味関心のなさ」の偏回帰係数は（β）=–.048（t（325)=–1.001 n.s），第３因子「目標」の偏回帰係数は（β）=.297（t（325)= 5.727***），第４因子「能力感」の偏回帰係数は（β）=.183（t（325)=3.373***）であった。したがって，意欲的行動第２因子「運動能力向上」に及ぼす影響は，「興味関心のなさ」を除く意欲のすべての因子において有意であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は，R^2=.268（F（4,325)=31.159***）であり有意であった。

ｃ．意欲的行動第３因子「交友活動」に及ぼす意欲の影響について

意欲第１因子「自律」の偏回帰係数は（β）=.254（t（323)=4.590***），第２因子「興味関心のなさ」の偏回帰係数は（β）=–.032（t（323)=.644 n.s），第３因子「目標」の偏回帰係数は（β）=.150（t（323)=2.747**），第４因子「能力感」の偏回帰係数は（β）=.203（t（323)=3.852***）であった。したがって，意欲的行動第３因子「交友活動」に及ぼす影響は，意欲の「興味関心のなさ」を除くすべての因子において有意であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は，R^2=.202（F（4,323)=21.630***）であり有意であった。

考察

以上の結果から，まず，「知識探究」が「自律」の影響を受けているのは，“話し合いでは，自分の意見を持って参加するようにしている”というように自分の考えをしっかり持ち自分から進んで行動する姿勢が，授業で積極的に発表したり，自分のわからない問題や疑問を積極的に解決しようとすることにつながるためであると解釈される。次に，「運動能力向上」が「目標」の影響を受けているのは，“将来なりたいものがある”や“今何かがんばりたいものがある”のように，理想とする自分のイメージや夢を持つことが，体育などで「次は○○の技ができるようになろう」と具体的な目標を持って行動することにつながるためであると解釈される。「交友活動」の「能力感」に影響を受けているのは，「自分はできる」という自尊感情を持つことで，対人場面においても自信を持ちやすく，それが積極的な人間関係構築と結びつくためであると解釈される。

以上より，仮説２を概ね支持する結果が得られ，本研究でとらえる「意欲」が実際の「意欲的行動」に影響を与えていることが明らかとなった。

全体的考察

まず，子どもの認知する親の「統制」の仕方が意欲に及ぼす影響について，「興味関心のなさ」においては有意傾向にすぎなかったものの「意欲」のすべての因子への影響が示されたことから，「統制」の仕方の中でも特に「モニタリング」が子どもの意欲にとって重要であることが示された。モニタリングにより，子どもの状態をよく把握し，子どもに合わせた養育を行うことで，子どもの意見や考えが受け入れられやすくなり，子どもは自分の行動や考えに自信を持つことができるようになると推察される。また，子どもの状態をよく把握していることで，子どもがうれしいときは一緒に喜び，また悲しいときはなぐさめたりするなど，子どもの状態の変化に気づきすぐに対応できるようになる。そのことによって，親子の心が近づき，子どもが「親はいつも自分の気持ちをわかってくれる」と思うことができ，それが積極的な行動を生む安心感や自信につながるのではないかと考えられる。

このことから，子どもの意見や思いを考慮に入れたうえで，子どもが主体的に考えて行動できるようにするような関わり方が望ましく，一方的に行われる「親中心」の統制は子どもが自由にものごとに関わることを難しくしてしまうことが推察される。

今後の課題

本研究では，「養育態度が意欲に与える影響」，「意欲が意欲的行動に与える影響」については概ね説明されたと言えよう。しかしながら，本研究で用いられた各尺度の下位尺度によっては，項目数の少なさやα係数の低さなどが示されたところがあり，今後はそれを踏まえたうえでさらなる検討を行い「養育態度→意欲→意欲的行動」という連続した因果関係を明らかにしていく必要があるだろう。

また，本研究では，「統制」について検討を行っ

たが，「統制」や「受容」など養育態度のそれぞれの側面は切り離して考えられるものではない。親の養育態度を保護‐拒否，支配‐服従の２次元で分類したSymonds（1931）の研究では，保護の傾向が高く支配の傾向が低い（何でも子どもの言うことを聞いてしまう）「甘やかし型」の親の元で育った子どもは反抗的に，支配の傾向が高く，保護の傾向が低い（子どもの行動をコントロールしようとするが愛情は与えない）「残忍型」の親の元で育った子どもは不安を抱きやすく神経質になることが示されている。このことから，子どもへの愛情と指導，どちらかが欠けてはよりよい子育てを行うことは難しく，「受容」「統制」は関連しあって子どもに影響を及ぼしていることが考えられる。そのため，今後は，「統制」と「受容」を被験者内要因としたうえで検討を行い，より一層養育態度が子どもの意欲に影響を与える過程について詳しく調べていくことが望まれる。

参考文献

笠井孝久，村松健司，保坂亨，三浦香苗　1995「小学生・中学生の無気力感とその関連要因」教育心理学研究 43巻　4号　424–435

柏木恵子，古澤頼雄，宮下孝広「発達心理学への招待」ミネルヴァ出版　1996年発行　P54

櫻井茂男「学習意欲の形成…親のかかわりの中で幼児期および児童期における学習意欲の形成―親の関わりを中心に―」2011日本教育文化研究財団研究紀要　41巻　60–64

菅原ますみ，八木下暁子，詫摩紀子，小泉智恵,瀬地山葉矢，菅原健介，北村俊則　2002「夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連－家族機能および両親の養育態度を媒介として－」教育心理学研究　第50巻　第２号　129–140

高野清純　編 1988「無気力　原因とその克服」教育出版

武田真梨子　2010「親の期待と子どもの受けとめ方－子どもの将来への意欲と自己否定感に与える影響－」ベネッセ教育研究開発センター

戸ヶ崎泰子　1999「小学生の学校不適応感に及ぼす小学生の社会的スキルと養育態度の影響」日本教育心理学会総合発表論文集　第41巻　709

速水敏彦　1993「外発的動機づけと内発的動機づけの間　–リンク信条の検討–」名古屋大学教育学部紀要　Vol.40　77–88

廣田佳代子　2004「親子関係が小中学生の「心の健康」に及ぼす影響–親子の生活時間に注目して–」東京工業大学大学院社会理工学研究科学位論文概集　No. 35　2004

深谷昌志　1990「無気力化する子どもたち」NHKブックス

船木智美・熊谷信順　2005「小学生の無気力感と学校環境適応感との関係」山口大学教育学部 付属教育実践総合センター研究紀要　第19号 93–102

李相蘭　2001「青年期無気力傾向に関する比較研究－日・韓の大学生を対象に－」東京大学大学院教育学研究科紀要　40号　139–150

広辞苑　1955年発行　第１版

文部科学省　2007「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（答申）

謝辞

本研究を実施するにあたり，小学校の先生方より多大なるご協力をいただきましたことに，厚く御礼申し上げます。また，調査にご協力いただきました児童の皆様に心から感謝申し上げます。

（2013年５月17日受付）
（2013年７月10日受理）